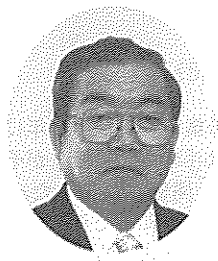


富山県立上市高等学校 学校風景



劔岳測量100年にあたり

同窓会長 伊東尚志

常日頃から同窓会活動に温かいご理解とご協力をいただいておりますこと、心より感謝申し上げます。同窓会員の皆様にはますますご壮健でご活躍のこととご推察いたします。

さて、教育界は昨今の履修漏れなど一連の騒動に始まり、教育再生に向け、教育基本法などの改正が行われ、「教育新時代」の第一歩を踏み出しました。

富山県内においても教育のあり方を探る「県立高校将来構想策定委員会」が開催され、高校の再編について検討が進められております。「質の高い教育の提供や運営面」などから避けて通れない問題ですが、また、一方ではそれぞれの地域での位置づけが論議を深めております。

ところで本年は、「劔岳測量100年」の記念すべき年です。明治40年7月、陸軍参謀本部陸地測量部（国

土地院院の前身）の柴崎芳太郎測量官らが、当時前人未踏といわれ「地獄の針の山、登ることのできない山」「岩と雪の殿堂」と表された劔岳に長次郎谷から雪渓を登りつめ、日本地図最後の空白地、存在感ある山容を誇るわが町のシンボル「劔岳」の登頂に挑んだ年であります。

その麓で育まれた上市高校の歴史と伝統をあらためて感じ、心のふるさと母校への熱い思いをさらに強くいたしました。

同窓会は今後とも母校とともに歩み、同窓生の絆をさらに深め、皆様の知恵と汗と時間を頂きながら活動を進めていきたいと考えておりますので、会員一同の限りないご支援を切にお願いしてご挨拶いたします。



間近には劔岳が

校長 加藤 憲 夫

会員の皆様には、益々ご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。また、日頃から本校の教育の充実と発展に多大なご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

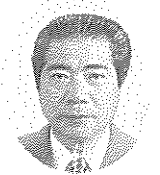
さて、昨年上市高等学校同窓会関東支部総会に出席した際、同窓生の内山太一さんのご講演を聞く機会がありました。その折り、劔岳について次のように話されたことがとても印象的でした。「上市高校で過ごした3年間、テストで思うように点数がとれなかったり進路で悩んだりしたときに、慰められ、励まされ、支えてくれたのが劔岳の雄々しい姿だった」と。「劔岳」はハイレベルの登山家を惹き付けてやまない北アルプスの名峰であることは言うまでもありませんが、教室の窓から望むその雄姿のみならず、生徒会誌「劔嶺」、セミナーハウス「劔嶺会館」の命名を思うにつけても、上市高校の卒業生や在校生・教職員にとって、劔岳が心のよりどころになっていることは確かなようです。

私は二十代初めより山登りを始め、岩登りや厳冬期の登山まではやらなかったものの、「山に住んでいるくせに、なぜそんなに山に行きたいのか気が知れない」と言われたくらい、山に魅せられた時期がありました。しばらくは、ルート沿いの植物や変化していく景色を見ながら一步一步登るといった普通の山登りをしていましたが、次第に、「何処どこの山を何時間で登った」という、「駆け上り駆け下りる登山」になっていきました。山仲間か

らは「そういう山登りは長く続かない」と言われていましたが、案の定、三十代半ば以降山に足が向かなくなりました。10月末に馬場島から劔岳に登ったのもこのようなやり方をしていた時で、既に何度か雪が降り、頂上近くの鎖の多くが氷の下になっているところを、無謀にもジョギング用の運動靴で登り、当時は「△△時間で登った」などと得意になっていました。数年後、池ノ谷に入った時、「早月尾根上部で足を踏み外すと、千数百メートル滑落し、ほとんどがここに落ちてくる」という話を聞き、背筋の凍る思いをしたものでした。

今年には劔岳測量100年ということで、町では記念事業が行われているようです。測量の任務に当たった柴崎芳太郎氏の苦闘と活躍を描いた小説「劔岳・点の記」は、初版が出るや否やすぐに買い求め、吸い込まれるように読み進んだことを思い出します。しかし、この本は友人が借りていき、芳太郎氏のご子息が講演に訪れた際、「借りた本にサインをもらったので、別の本を返す」ということになり、手元から離れていきました。その後、約束は果たされず、やがて絶版になり寂しい思いをしていますが、今春30年振りにこの本が私のところに戻ってきました。「借りたものを返さないのはおかしいが、今頃になって取り返す方にも呆れる」という声も何のその、失った青春の1ページが戻ってきたようで、しばし至福の時を過ごすことができました。

近年、高校の山岳部は衰退傾向にあり県内でもわずかに数校しか活動していませんが、校歌に「青雲光る大立山」を載く上高生にとって、登山文化を継承する何かよい方策がないものかと、日々劔岳の雄姿を見ながら思っているところです。



「集い」の開催によせて

副校長 鍋谷 正 成

今年は、新潟県中越沖地震や豪雨による大災害が起きる等自然の変化が厳しい年になりました。同窓会員の皆様には、ご健勝で、各界でご活躍のこと、誠に同慶の至りであります。

さて私事になりますが、母校に勤めさせていただいてからはや26年目を迎え、あらためて責任の重さを深く感じているところであります。

思えば、現同窓会は、昭和24年8月17日に産声を上げました。初代会長山本宗問氏（旧制2回卒・物故）は、県下はもとより全国的にもユニークな同窓会活動に取り組み、31年間の永きに亘って幾多の輝かしい業績を残されました。中でも、「各10年ごとの集い」は、将来主役になる若い会員の友情と交流を深めることを目的として続けられているものであります。さらに、会員の総会への出席が減少していることへの対策として、昭和46年

8月17日に「卒業30年組の集い」が、翌47年には「卒業40年組」、そして48年には「卒業50年組」がそれぞれ第1回目の「集い」として、開催されました。私も今年「卒業40年組の集い」を迎えるにあたり、この事業を立案していただいた初代会長に感謝するとともに、「上高」で力強く結ばれた友情の絆を再確認し、10年の空白をうめたいものであります。

また今回は、「50年組」、「30年組」、そして「20年組」の集いも盛大に開催されると聞いております。「各集い」の会員の皆様方には、心からお祝いを申し上げます。

開催の会員の方々には、本校が創立以来一貫して掲げる校訓「勤労・自治・向上」の精神に育まれた同窓生として、今後とも伝統ある母校を愛し、劔岳、上市川、桜並木、三本杉等自然環境に恵まれた母校での青春時代の思い出を語り合っていただきたいと思います。

中庭の「友情の碑」が示すように、同じ体温の手をつなぐ同窓の仲間として、本校が今後ますます飛躍するとともに会員の皆様の一層のご発展とご多幸を心からお祈り申し上げます。